

「現代女性とキャリア連携専攻」発足について

高頭 麻子

21世紀に入り、各分野で活躍する女性が増え、目立った女性差別は減少しているとはいえ、日本はまだ男女平等社会の実現という点では後進国である。小学校から大学までずっと平等に扱われてきたのに、実社会で仕事するようになって初めて理不尽な差別に直面して衝撃を受けた、という声もよく聞く。こうした現状に対し、女子大学はもっと積極的に果たすべき役割があるのではないか、という問い直しが、本プログラムの始まりにあった。

2006年秋から目白と西生田、両キャンパスの有志が集まって、女子大学の存在意義を積極的に担うための模索が始まり、翌2007年に、

- ①学部学生全員必修の「教養特別講義」を、現代日本で女性が生きていくために必要不可欠な諸問題をバランスよく学べるプログラムに再編すること(=全学の共通基盤)
- ②女性が置かれている文化・歴史・社会・身体・生活上の現実を、学部・学科を越え有機的・総合的に学べるプランの創設(=学生各自の個性に応じた所属学科+アルファの勉強)
- ③これらの教育プログラムをバックアップするものとして、現代社会における女性のキャリアについての研究・データ収集・国内外との連携を進める「現代女性とキャリア研究所」の設立(=より専門的な研究ネットワーク)

という3つの方向性が決まった。

この②が当プログラムである。ⁱⁱ 女子の総合大学である本学の特質を十分に活かし、多様な科目を、学科の枠にとらわれずに自由に組み合わせて履修するメニューを提供している。各学科の学生が、自分の専門分野を探求すると同時に、他の分野の学問対象や思考・分析方法を学ぶことによって、各自の潜在的な素質や能力を最大限に引き出し、現代社会の様々な場面での確に対応できるよう、また他者への理解やコミュニケーションが豊かなものになるよう、工夫されている。

ここでいう「キャリア」は、仕事だけを指すわけではない。男も女も、人生は仕事ばかりでは成り立たない。仕事は有能でも家庭生活が満たされないようでは、充実した生活とは言えないであろう。特に女性は、出産に際しての心身の不安、仕事上の変化に直面することも少なくない。育児や介護で、女性の負担が大きいことも事実である。そうした問題は、自分一人で抱え込むのではなく、家族や地域社会の中で解決していくべきものであろう。つまり、現代の社会環境全体のなかで、女性が歩いていく人生そのものの「キャリア」を広い視点に立って考えていこう、というのである。

履修学生は、特設のコア科目群ⁱⁱⁱから 2 科目 4 単位以上を、そして女性文化関連科目・ワークデザイン関連科目・ライフデザイン関連科目の 3 系列^{iv}から各 4 単位以上を自由に選択することによって、それぞれの「現代女性としてのキャリア（生き方）」を掴み取っていくことを目的とする。1 年次から 4 年次まで、いつでも履修を開始することができ、また、コアを含む各科目をどのような順で履修してもよい。24 単位以上を履修した学生には、修了証書が発行される。

2008 年度 4 月のスタート時点には、学内への周知が徹底せず、コア科目の受講生は少なかったが、口コミによって人気が高まり、特に毎回各学科卒業生をゲスト・スピーカーに迎える「女性と職業」は、学生とゲスト・スピーカー双方に評判がよく、ゲスト・スピーカー同士のネットワークも生まれつつある。2 年目の今年は、どの科目も履修者が激増した。受験生や企業からも注目されている、と伝え聞く。学生たちが、社会人としての自覚、女性であることに誇りをもって巣立っていくのが楽しみである。

ⁱ例えば 2008 年末の世界経済フォーラム発表では、日本の平等度は世界で 98 位。

ⁱⁱ当初、両キャンパス協同で実現する計画だったが、人間社会学部の副専攻改革プランの助成申請の採択が、2006 年度末に決まったため、同学部の「キャリア女性学副専攻」が一足先に 2007 年度に開始された。そこで「現代女性とキャリア連携専攻」は、目白 3 学部で 2008 年度に始まることになり、一部の科目で両キャンパスの相互乗り入れをしている。

ⁱⁱⁱ「女性と職業」「女性と身体」「現代男性論」「現代女性論」「日本の女性史」「世界の女性史」の 6 科目。いずれも学科科目とは違う角度から、女性の置かれている状況を考察する。

^{iv}各系列 30 科目前後から成り、各学科の専門科目、教養科目、キャリア形成科目、人間社会学部の「キャリア女性学副専攻」から提供されている。

(たかとう まこ 文学部史学科教授)